

2009 年度研究紀要抜粋 本間先生による「こどもの哲学」を楽しむために」

5月22日 研究全体会記録 「こどもの哲学を楽しむために」 本間直樹 大阪大学文学部准教授
2006年度から〇〇小学校に協力のもと、3年間授業を検討してきた。〇〇小学校にて、3年目を
むかえて、本校で行われた授業がどのような意味をもつのかについてお話をしたい。

子どもの哲学

〈子ども〉と〈おとな〉が対話を通してなかなか答えのない問いについてともに考えること。

対話しながら考える

〈問答〉＝問いと答えを繰り返しながら考えることです。

対話は「おしゃべり」ではありません。人から聞いた知識をそのまま横に伝えるのではなく、自
分や他人の疑問に耳を澄まします。

対話では、聴くこと、理解することが何よりも大切です。

本間 対話とは、基本形は問答。おしゃべりではない。おしゃべりの延長ではあるが、よその情報を伝える
のではなく、相手の言っていることをわかっているのだろうかと感じながら考えながら、会話す
ること。

各国での取り組み

子どもとおとなが対話を通して考える試みは、国や文化によって取り組みはさまざまです。

アメリカ「こどものための哲学」philosophy for children (p4c)

イギリス「子どもとともに哲学を探究する」philosophical inquiry with children

こどものための哲学

コロンビア大学教授マシュー・リップマン Matthew Lipmanによって「philosophy for children
(p4c) (こどものための哲学)」として1970年代に提案される。

アメリカをはじめ、ヨーロッパや中南米、アジア、オーストラリアなど世界各国で、対話型の教育、
教科的横断的な学習法や市民教育の一環として実践されている。

本間 はやいところでは幼稚園から取り組んでいる国がある。アメリカでは、幼稚園から中学までカリキ
ュラムが作成されている。アジアでは韓国が盛んである。

「こどものための哲学」の目指すもの

論理的・批判的思考能力

創造的思考力

状況のなかで考え、経験に意味を見出す力

対話を学ぶ、他人とともに考え、他人を理解する

公共的対話の訓練、市民教育

小学校で（フランス）

議論をしながら、話し、書き、読むの総合的な学習をおこなう

本間 フランスの小学校での実践。国語の時間で、テーマディスカッション。友だちとは・・・など、一
人一人の意見をださせる。その意見を新聞にまとめ、それを読んで再度意見を出させる。どのよう
に意見が変わったのかなど。

中学校で（アメリカ）

教師ではなく進行役が議論をリードする。教師も議論に参加する。教材は必ずしも使わない。進行役からどんどん問いを出して生徒を触発する。

本間 アメリカの中学校での実践。写真では、「ものの本質とはなにか？」について議論された。

オーストラリア ビューランダ小学校

1年から6年までのすべての学級が週に1時間

「哲学」を学ぶ 20人に2人の教員

大学研究者と一緒に教材を開発する

小学校教員組合で研修を実施

本間 オーストラリアのビューランダ小学校での実践。週1回、哲学の授業が行われる。異学校間での教員の交流をし、教員交換をする。オーストラリアからシンガポールに勉強のために、教員派遣など)をする。授業の様子。机やいすをのけて床に円になって座る。(リップマン形式)円になって、ひとりずつ意見を言っていくのが通常のスタイル。時には、ノートを使う。「変化とは何か？」というテーマで5・6年生が授業をしていた。一人一回は発言をする。次の発言者は、先生が当てることもあれば、前の発表者が当てることもある。1・2年で使うツール。Rea（「本物」の形容詞が合うものとは？）花・怪獣・・・分かち合うとは？「わかちあう」「わかちあわない」いきなり言葉では難しい。自由に絵に書いてみる。

1・2・3年生、準備学級で話し合われるテーマや概念（ビューランダ小学校の例）

自己、自分	アイデンティティ、わたしはだれか？
所属「わたしは・・・の一員です」	家族
仲間、近所の人、集団、地域	文化
人を思いやること	自分や他人を尊重すること
同じことと違うこと	責任
善いことと違うこと	持続可能性（環境に関すること）

4・5・6年生、中学生

自分	善悪、倫理	アイデンティティ、私は誰？	美しいってどんなこと？
文化	変わること	からだ	働くということ
尊重、尊敬すること		歴史	人を思いやること
時間について		責任	違い
価値	何のために？（目的）		協力すること
知ってどういうこと？	勇気		（知識）

本間 テーマは自分に近い他人に譲れないところから始まると自分の考えを深めていく

考えるスキル（技）の例			
準備学級	・ 聞く/理由を言う/問う/述べる	4年生	・ ベつの可能性を考える
1年生	・ 例をあげる		・ 区別する
	・ 他人の意見について考える		・ アナロジー（類推）
	・ 振り返る		・ 類推と相違
2年生	・ 問いをまとめる	5年生	・ 前提を探す
	・ 何、なぜを問う		・ 誤った推論を見つける
	・ はい/いいえを問う		・ アナロジーを検証する
	・ 説明する		・ 関連づける
3年生	・ 違ったみかたをする	6年生	・ 仮説を立てる
	・ 基準をあげる		・ 議論の進み方を評価する
	・ 定義する		・ 推論する
	・ 判例をあげる		

本間 最初から大切なものは何か定義できないが、話し合うことで定義できる。

メキシコ ペケーニョソル小学校
1年から6年まですべての学級が週に1時間「哲学」を学ぶ。
20人に1人の教員
リップマンの教材を利用
多文化理解の基盤として

本間 リップマンのやり方で床に座って授業をする

4年 クジラにこどもが遭遇する。クジラは目に見えないが少年は近づいていることを知る

- ・ キョンという少年はどうしてクジラが近づいてきたことを知ったのか。
- ・ 想像することと推測することはどう違うの？

このときはこどもに難しかったのか集中していなかったようだった・・・

中学校 「問い」とは何か？についてグループ学習をしていた。図書館の中、机、いすに座り、問いとは何かについて中学生が進行役をしていた。知識ではなく、実践していくのが特徴。

本校で行われた実際の授業から

絵本「ともだちや」より
キツネは一時間100円でともだちになってあげる「ともだちや」になることを思いついた。最初のお客は「ひとりぼっちの食事はつまらん」というクマ。キツネは苦手なイチゴと一緒に食べ、200円を受け取る。次にキツネを呼んだのは、オオカミ。トランプをしてオオカミが3回勝ち、キツネが一回勝った。おそろおそろお代を乞うキツネに、「おだいだって！お、おまえは友だちからお金をとるのか、それがほんとうの友だちか」とオオカミは目を尖らせる。
これをきっかけに二人は仲良くなり、オオカミは大切にしていたミニカーをキツネにあげる。

本間 議論しやすいお話はないかと考えていたときに「ともだちや」に出会う。授業では、本を見せずに進めていく。知っている子どもが多い。最初、要約しか与えない。簡単なあらすじの提示からはじまる。これを読ませることから授業が始まり、いきなり「さあどう思う？」と投げかけた。さまざまな議論が行われた。

5年4組 岡田学級の授業の感想から

- ・おもしろかった理由は、いろいろな人の意見が聞けて、この人は私と違う意見だなと考えることができるからです。
- ・みんなの意見を聞いて考えることはとてもいいことだと思います。

本間 この感想は、子どもだけのものではない、大人にもある。哲学カフェということをやっている。話し合うだけの会を持つ、いろいろな意見が聞けて、この人は私と違う意見だ。これはものすごく大事なことである。考えることにとって、重要で必要不可欠なことである。私の意見というのは、はっきり言うといきなりはない。例えば、いきなりあなたはどう思いますかと尋ねられても、いきなり思いつくことはできない。私の考えとか私の意見というのはどういう風に生まれてくるかという自分と異なるものと出会った時、自分はそうは思わないなという気づきがあった時に初めて、もっとそれについて考えてみたいとか。他の人はさらにどう考えているのだろうか。なぜそう考えるのだろうかとか。自分はなぜ違う考えを持ったのだろうか。ということに気づいて初めて、次の展開に思考が働いていく。それは当たり前のように当たり前ではない。私たちが考えることを触発するのは何かというと、何か品物のように他のモノに出会った時。

なかなか自分の意見が言えないというのもありだと思う。哲学カフェをやっていると、いろいろな意見がでてきて、それを一生懸命考えるので精一杯で、自分の考えを作るまではできなかったがすごくすごく考えました。と大人の方でも言われると同じように人の意見によってすごく考える。この授業で、一部の生徒ばかりがしゃべっていて、他の生徒がおいてきぼりにされているということをおられると思いますが、そういうこともあるかもしれませんが、必ずしもそうとは限らない。じっと聴いている子はすごく考えている。考えている子ほど、じっと聞いていますから信頼してあげてください。哲学カフェをやっていて、じっとされていた方に、つまんなかったかと尋ねると「いや考えていたのだけどなかなか考えがまとまらなかった。」考えるのですね。聴くことはすごく考えさせる。この子の意見もおもしろい。なかなか自分の意見は思いつかないものです。

- ・最初自分も何か、意見を考えないと思っていたのに、思いつかなく、ずっと考えていました。それでも思いつかなく、困っているといい思い付きがあったのです。そういった意見を自分がどう考えるかと考えると思うと私はこう思うということを思いついたのです。短時間だけですが頭を使ったと思います。

本間 これもとてもよい意見だと思います。本当にこの通りだと思う。人の言った意見を自分はどう考えるかという時に、私はこう思うというのが生じるのです。こういうことダイレクトに書いてくれたこと。私はこの感想頂いた時、わたしはとても驚き、喜びました。どれもおもしろいのですが。

- ・いつもの話し合いよりも、いろいろな人のいろいろな意見が聞けて楽しかったです。それに応じて自分の考えが変わっていくのがおもしろかった。

本間 ここも大切である。実際、議論する楽しさ、話し合いをする楽しさというのは、どんどん子ども達、私達も変わっていくということです。ここがディベートとかそういうものは、立場を分類して、立場を守るといふタイプの議論とは違うところで、自由に人の意見を聞きながら自分の考えを変えてもいい。それがなぜ変わったかを後で考えることが大事ですが、こういう授業とは違う点である。自分の考えが変わっていく。わたしもそうである。哲学カフェをすると必ず、何かが明確になったり、ある人の発言によってこういうことがわからなくなったり、私の中で変化が起こる。変化というのがすごい大事である。一見楽しいだけじゃないの？ 当り前のことじゃないの？ と思われそうですが、当り前ではないのです。

授業での対話から

1月22日の5年生「ともだちや」の話し合いを振り返って

本間 私がどんなふうに議論を見ているのかを知りたいというので、青字で書いている所は、私が後から書きこんだ項目です。この授業は1時間の授業ですが、非常に多くのことが話し合われている。6つぐらいフェイズがある。

金澤 物語を読む

板書 ともだちや

誰が出て来た

キツネ クマ オオカミ

どんな話？

狐がともだちやで、ひとりぼっちの人を、1時間でお金をもらいながら、ともだちのふりをして 友だちやになって、お金をとるのだけど、オオカミにあって・・・

■フェイズ1：感想（解釈）を出し合う

金澤 いちど自分で読んでみて

プリントは机の中にしまう

今読んだ話でどんなことを感じたか？

（こどもたちの答え）

狐はほとんどは友だちがほしかった。友だちがいない。オオカミがほんとうのともだちだといってくれたから、キツネはうれしかった。

クマがひとりぼっち。狐とクマはおなじ考え。ひとりがつまんなかったから、ともだちを欲しかったクマはキツネを呼んだ。

キツネは、クマに対しては苦手なイチゴを食べた。お金が欲しいから手を出した。

クマは、狐を呼んだのは、一人が食べるのが寂しいから、べつに友だちはいなくてもよい。

金澤 あとは？

A オオカミは本当のともだちが欲しくて、キツネを呼んだ。オオカミが一番大事なミニカーをあげたからそれだけキツネのことを信用している。

【解釈の提案1：「信用」というテーマを打ち出している←ここで「信用」ってどういうこと？と質問するのもよい】

キツネはお金も欲しかったと思うけど、本当の友だちも欲しかった。

本問 プリントをしまうことは大事である。答えはあなたたちの心の中にあるのだから自分で考えなさい。プリントが答えではない。今聞いた話からどんなことがわかったのか。後はと言ってどんどん聞かれる。最初にコメントをはさまないでどんどん聞いていかれる。最初の方にあまりコメントはさまないのは非常にいいと思います。進行のやり方というのは、スキルが必要で経験も必要。この授業でも金澤先生はベストの進行役をされている。導入の仕方ですが、最初にコメントしてしまうと、先生のコメントにひっぱられてしまう。最初はどんどん言うというシーンが5分でも3分でも必要である。後はという後にAさんが解釈をあげる。信用するという一つのテーマを提案している。進行役とすれば、信用とはどういうことと聞けばよかったです。ここは流された。流されたことによって、関連する発言がでてきた。ここから劇的に話が変わっていく。

■ **フェイズ2 問い1「オオカミはお金がないことの言い訳としてミニカーをあげたか？」**

N えっと、オオカミはお金をもっていなかったから、あげる気はなかった。説得する。言い訳的。

【解釈1に対する別の解釈（仮説）2】

金澤 「言い訳的」って？

【分からない言葉遣いに対する質問】

N お金をもっていなかったから、言い訳的なことをしてごまかそうとした。

【解釈2に対する説明1】

T Nさんは「言い訳」っていつていたが、

（オオカミは）ひとりできて、ともだちがいなかったから、

お金をもっていなかったとしても、オオカミは本当にともだちになりたかった。

【解釈2に対する反論その1】

H お金をもっていないから、言い訳というが、その翌日にオオカミが一番大切にしていたミニカーをあげたので、それはないと思う。

【解釈2に対する反論その2】

K オオカミはトランプで3回も勝つのだから、自分より強い人を探している。

【解釈3の提示】

B ごまかしでミニカーをあげたというけれど、ごまかしで一番の宝物をあげないと思う。

【解釈2に対する説明1に対する反論】

T 一番大切なものをあげてごまかそうとした。

【自分の解釈を再確認】

お金ではなくてミニカーをあげた。

【物語のなかの事実を確認】

たぶんやけど、もしごまかしやとしても、ともだちではなかったらミニカーはあげない

【自分の「ごまかし」仮説に並行して、別の仮説「ともだちでなかったらミニカーはあげない」を導入】

一番大切なミニカーをあげるくらいだから、ほかのものでもあげると思う。

【新仮説の展開】

（でもミニカーは）一個しかないから大切。

【仮説のなかに含まれる「価値」の意味について掘り下げる。希少性あるいは唯一性による価値】

キツネがオオカミのことをともだちだと思っていなかったら、そのまえに金くれというはず。
ミニカーでは金にならないから、金くれというはず。

【新仮説「ともだちでなかったら・・・」をキツネの側から展開】

人間にすればミニカーは安いかもしれないが、動物にとっては高いはず。

【自分の仮説のなかに潜んでいた別の仮説を説明する：価値の相対性】

S おれ、N君（←書き取りの意味不明）、ミニカーでごまかすというのは、ミニカーが高いから。

本間 Nさんと金澤先生との問答が始まる。物語には書いていないオオカミはお金を持っていなかったのだという仮説、推測を持ち込む。お金がないのをごまかすために、おまえは本当の友だちからお金をとるのかと言ったのではないかという説をだす。まず、金澤さんは、言い訳とはどういうことと聞かれています。これは重要なことで、分からないことに対してどういうことと聞かれる。Nさんに対する反論がおこる。Tさんが物語の中の事実を確認して、推論を作っていく。Tさんの意見はすごく展開をしている。自分で価値の意味について自分で考え直す。ものすごい短いフレーズの中で考えがとんとんと変わっていつている。キツネの側からの考えを話す。更に、価値の相対性にも言及している。一瞬のことですけれども、ずっと話す中で考えを展開している。その場にいるとその考えについていくのが必至である。一見、わーと話しているだけにみえても、すごく細かい表現上の操作が入っていて、展開が進んでいるということです。ここでTさんの大推論のおかげで、Nさんの問いに対する反論がとりあえず成り立って、お金がないという仮説が成り立ったとしてもそれ以外の理由でミニカーをあげたんだそれが友だちと認めていったからだということがきっちり議論された。ここで終息をする。

本間 Tさんの発言の時には、何を考えていたのか

金澤 彼の発言の中に、こんなに論理の展開があるとは知らなかった。忍耐を持って聞いてあげると姿勢だけである。長いので早くおわらないかなと思っていた。とても長い話なので論理が通っているのかなと思っていた。本間先生のこうして指摘して頂くとなるほどなとその言葉ひとつひとつにもつながりがあるといことに気がついた。前のN君の発言をよく聞いているのだなと思った。

本間 いったん相手の仮説を受け入れて、それに対して自分はこう思うと言っている。私も聞きとるときは、必死に書き取っているだけなので考えてはいない。あいづちを入れながら、聞かれていますのでしよう。

金澤 そうです。にこやかにあいづちを入れている。

本間 それは、他人ごとではなくて、うん、うんそれでと聞いているので、対話なのだと思う。困ったことを言い出したなどのはよくあることだと思う。それでいいと思う。よい聴き手であればいい。この時わからなくてもいい。自分はちゃんと自己解決をしていく、豊嶋さんのように。論理というのは、多少の飛躍はあると思います。飛躍はあっても、論理は教えるものではなくて、自分で納得するものである。時間をかけて聴いてあげると話しているうちに、ここは違うなとかということに自分で気づく。論理は人から教えられて、「おまえはこうなのだから、こう考えろ」という筋道を人から与えられるのではなくて、発見するのもであるそれがすごく大事だと思う。これはその例だと

思う。フェイズ4は、お金の価値と物の価値はどうか。自分達の宝物を人にあげるのかという自分達の実生活の話。後は、議論することから、交換することとあげるということの違いについて話し合う。そこで、タイムアウト。

■フェイズ3 テーマ：本当のともだちとは？ クマとオオカミの違いから

K オオカミは本当の友だちが欲しかったから、出会えてよかったと思う。

キツネは最初はお金がほしかっただけ。なぜなら、クマに金をもらうためにきらいなイチゴを食べた。オオカミの場合は、トランプに負けたけど、金をもらおうとしたけど、オオカミに本当のともだちと言われてうれしかった。

あさっても来ていいとはいわないと思う。

C ミニカーを一台しかもっていなかったら、なおさらミニカーをあげないと思う。

オオカミはキツネのことを本当の友だちだと思っているから、一番大切な車を友だちの証としてあげたと思う。

H たぶん、クマとオオカミは性格がちょっとちがう。クマはひとりで食べるのがつまらない、というそれだけ。オオカミはトランプをしてずっといてほしいと思う。オオカミは友だちが欲しくてそう言った。

金澤 もういっぺんいってみて

えっと、クマは、イチゴを一緒に二人で食べるためによんだけど、オオカミはずっといるというか、ただ2時間とか1時間ではなくて、本当の友だちをつくるために呼んだ。

金澤 オオカミは、本当のともだちをつくる気持ちが強いということか。

キツネはともだちやとしていったが、オオカミはともだちやだとは思っていなかった。ともだちやを呼んだわけではない。

オオカミがあげた大切なミニカーは本当だったらあげないけど、ちゃんとした友だちの証として、いつでも話できたり、トランプとかいっしょにあそべたりする

金澤 きみにとって「ちゃんとしたともだち」とは？

【具体例を通して意味を確認する】

いつでも話できたり、トランプとか楽しんでできたりすること

本間 H君に、クマとオオカミの違いについて考える。オオカミはトランプしてずっといてほしいと思っている。子どもは細かい所をついてくる。H君はちゃんとした友だちと表現している。これもすごくよい聴き方なのですが、「君にとって」というのが大事。「君にとってちゃんとした友だちとは何なののか？」定義なり、見返りを通して定義なり、意味を確認することをされて、もう一度自分の主張を繰り返して、同じことを繰り返しているのですが、この繰り返しが大事。自分が相手の聴き手を通して、自分が何を言ったのかということをもう一度聴き返ることができるので、この聴き返しが大事だと思う。一つのフェーズが終了する。

■フェイズ4 テーマの展開：ものの価値、大切なもの、お金の価値とは？

N ミニカーが一番大切だったらお金を上げた方がいい

金澤 どういう意味？

ミニカーが一番大切だったら、お金を上げた方がいい

金澤 ミニカーよりお金の方が大切？ 地獄の沙汰も金次第か？

ミニカーの方が大切なんやったら、お金をあげたほうがいいと思う。お金が大切だったら...
けど、そいつが反論したから、その反論の反論 (口論がはじまる...)

お金がないから、ミニカーをあげたほうがいいのに、お金をあげた方がいいということになる。

違う話？

金澤 ちょっとぼくには分かりかねるけど、だれかが分かる？

ミニカーは大切やけど、百円よりやすい

ミニカーが一番大切だったら、お金はそれほど大切ではないから、お金を狐におあげたほうがよい。

それ

Nさんは、お金をもっていないから、といった

ともだちからお金をとるのかほんとうの友だちか？と言うが、大切なものでもともだちだったらあげるとおもうから、

■フェイズ5 問い「大切なものをともだちにあげるか？」

金澤 大切なものをともだちにあげる？ きみらこれまでどうだった？

あげた。好きやったキーホルダーをともだちが好きだといったのでそれをあげた。仲悪くしたくないから、せっかくともだちになったから。

金澤 そんな経験ある？

ない

金澤 なんであげない？

あげなくても

ものをあげたからずっとともだちであるわけではないと思う。

M ものをあげたからずっとともだちというのではなくて、あげなくても、しゃべったり遊んだりするのがともだち。

あげたことがある。ともだちが欲しいといったらあげるときもある。

どうしてあげてしまう？

H ものをあげるとともだちになるというのは、ただの気遣いで、大切な者ばかりあげていたら、ともだちがこれとかくれるわと、逆にいじめられる。なれあったりして、いっしょにあそんだり、あそびにさそったりしたほうがよい

Y あげたことはある。大切ではないものをあげる。

I ケンカするほど仲がいいいうから、あげなくてもよいと思う。

H 友だちがちょうだいと言って、きらわれるから

オオカミは自分からあげたから、そんな変な意味ではない。

■フェイズ6 テーマ：「交換」と「贈与」の違いについて

D 交換はいいけど、ちょうだいという気の弱いひとにわざというかもしれない。この人にきめた、大切だけどあげたいもった。これは違う。

あげるという、ともだちと、ふつうのものと私のふつうのものを交換して、交換期限をきめて考案する。

金澤 あげることはしない？なんで？

あげたらずっと返ってこないからいや。

あげたことはないが、もし、あげるともだちになれるのなら、ともだちになってほしい人がいっぱいいたら、自分のものがなくなる。

大切なものをちょうだいといわれてあげるのは、いや。おみやげのように自分からあげたいもの、あげたから友だちではない。

金澤 してもらわないと友だちだとおもう？ あいつはなにもしてくれないからともだちじゃない、とおもったりしない？

みんなともだちにもとめない？

ともだちに直してほしいことがある、それを言ったら、逆に反発されるから言わない。自分が一方的に責められたらいいかせない。

あいてからしてくれることはいい、おもったりしてやってもらうのはちがう。

どうということ？

しせんでやってもらうのはほんとうのともだちではない？

金澤 「しせんでやってほしい」どうということ？

なんか、やってよ、というかんじの目。

そういうことは友だちじゃない？

金澤 いまどうということ話しているかわかる？

自分でやり遂げるのもの大事だと思う。

H これやって、といてやってくれないからといて話さない、というのはちがうと思う。

このまえやってあげた。自分ができるともだちができないことをやってあげる。助けてあげる。助けてもらったから助ける。

助けてもらうのはいいのか？

恩返し

助け合うは、いっかいじぶんが助けてあげないとだめ、ふたりで一緒に助け合う。お礼で助け合う、だから...

求めるということは、自分から助け合うだったら、困っているから

求めるというのは困っていないから、求めるはよくない。

金澤 「求めるのはよくない」意味はわかる？

何をともめるのが問題。できないことをともめるのはいいけど、
自分ができないことはともだちに助けてもらうことはいいと思うが、自分がちょっとくらい
できることは求めない。

自分がどうしてもできなかつたらいいけど、一個でも多く自分でもできることを見つけた
ほうがいいから。

金澤 つづきは、求める、とか助け合うとか、考えたい。

今日のノートに、今日考えたことを書いて。

本間 やってる最中とは大変ですよ。

金澤 やってる最中は大変です。聴くことと先進めることを二つ考えないといけない。それは本当に大変
です。

本間 やはりこういう授業をして自分をトレーニングしたいというのなら、記録者をおくか、もちろんビ
デオとか撮られて、テープ起こしをするのもいいです。ふりかえるということは、進行役のトレー
ニングになります。やりっぱなしがこわいな。もっと自分がどんなふうに進めたらいいのかとか、
自分のくせとか、自分はちゃんと聴けていたのだから確認するということをやられたらいいと思
う。みなさん自身のふるまいというよりも、子ども達が自分の見逃していた様々のポイントをどん
だけ多様に、あ、もうちょっと言いたかったのだなと言うことをもう一回振り返るために見られた
らいいと思う。たぶん、それ以後の授業で、この子はこんなことを考えているのだという助けにな
ると思う。この筆記といのは大変ですけども、すごくいいです。テープ起こしは面倒。その場で
が一と打つのがいい。手っ取り早い。不十分で書き落としもあるけれど、大学院の授業でもやって
いる。進行役のトレーニングを大学院生とともにやっている。話されたことを全部筆記していく。
よくやり、結構トレーニングになる。ここからは、みなさんとのディスカッションにしたい。

おとなと子ども（1）

子どもがおとなより得意なこと

思ったことを口にする

疑問に思ったことやアイデアをすぐに捨てない

妥協をしらない

知識や経験に頼らない

素直に聴く

おとなと子ども（2）

おとなが少し得意なこと（？）

聴くこと

待つこと

まとめる（関係づける）こと

思い出すこと

本間 子どもの疑問に思ったことやアイデアをすぐに捨てないというねばり強さが素晴らしい。それが、考えることの本動力である。言われたことをはいはいと聴くだけでは、考えるのではなくて右から左へ聞き流すということになる。やっぱりあなたはそう言うけれど、この点はこうなのじゃないかとふんばる力が哲学のようなゆっくり考える、ねばり強く考える上ではとても大切なことで簡単に妥協しない。こういう授業では、やっかいな生徒さんの方が活躍します。

知識や経験に頼らないはデメリットではあるのですが、経験に頼らないですが、大人は経験に頼ってうまく言ってきますけれど、大人の悪い部分は自分の経験していないことを自分の経験にかつてに入れてしまつて、一般論を受け入れてしまう。それをしないということが結構大事なのです。本当に自分が経験したことが多分大事。

大人が経験上持つ技術として、聴く技術。子どもには難しい。グループワークをした時に、なかなか相手の意見が聴けない。しんぼう強さが必要で、だれかが話している時は、彼が話している時はみなさん聴きましょうと言って先生が対応する。この子が発言しているのだから、待ちましようとなる。まとめる（関係づける）というのはいきなりは子ども達には無理なので助けてあげる。あと、こういう意見があったよねと言って忘れられていく意見を引っ張り出して、関連させる。想起させる。想起させるというのはとても大事である。さっきこういう意見があった、今の意見とどう関係があると聴くことがだいじである。でま、こういのが進行役である。

おとなにできること

おとなはこどもたちの問いかけを促し、発言を助ける役割（進行役）をします。

進行役にとつてもっとも大切なことは聴くことです。

おとな（先生）がこども一人一人と話すだけでなく、こどもどうしが対話を始めるのを助けます。

どうして進行役？

一対一は力関係が現れやすく、おとなどうしても一対一で対等に話し合うことは難しい。

いっしょに考えるなかまが必要。同年代からの発言が互いの関心を引き合う。

本間 進行役は基本的には聴くことが大事であつて、聴くことは何か理解しようとするこつで、理解するのは難しい。わからない発言が出た時は、分からないなりに聞き流さないで受け止める。そんな時はコメントをするのではなくて、先ほどの金澤さんみたいにコメントされないことが非常によいのです。へたに口をだすよりも、それについて別の生徒さんがあとで触発されて言うことが大切である。それが授業において特に大切である。へたくそにコメントをして議論を方向づけるよりも、むしろ子ども達のリアクションがおこることを待つことの方がよい。子ども同士の対話を始めること助けることが基本だと思います。

「話す・聞く」で大切なこと

「自分の考え」は一人では浮かばない →他人の異なる意見を聴くことから始まる
格式張った「スピーチ」よりも、よい聴き手の前でゆったりと話すこと
何より、本当に考えたいことをみつけること
まずは1対1の問答から
思ったことを口にする
グループ対話は適切な進行役がいなければ成立しない
形式に囚われないこと「パネルディスカッション」や「ディベート」は大人のよくないところ
だけを真似てしまう。

哲学の問答

「答え探し」よりも、疑問を〈問い〉としてことばにすることが重要です。

- ・ 問うこと：小さな疑問を見逃さない。
- ・ 話すこと：ゆっくりといねいに意見を作ってみる。
- ・ 聴くこと：賛成／反対の前に一緒に吟味する。

本問 国語の教材について。今度の学習指導要領では、話す、聞くがかなり上位にうたわれていて、これをどうやって教室に実現していけばいいかということでお悩みとお聞きしました。これを見て驚いたのですが、5月にいきなりスピーチという題単元が入っている。自己紹介しようで知ってほしい自分のこと、6月になると日常生活について話す、聞くとあって、フォークとおはしどちらが好きについて話し合う、9月グループで話し合う、おもちゃについて説明する。ニュース番組をしましょう。1月にはグループの対話、話し合いが目標になって、ディベートとかパネルディスカッションをしましょう。学年によって違う。2年生はグループで話し合ひましょう。3、4年生はランドテーブル、円になって話し合ひましょう。5年生はディベートしましょう。6年生では、パネルディスカッションをしましょう。と書いてあります。私、これは私の意見ですが教育のプロではないのですが、哲学の観点からみると何が大事か、とても限定された意見として聞いてほしいのですが、こう思う。まず自分のことを話しなさい。難しいと思う。私が皆さんに自分のことについて話す時に、皆さんが私のどんなことを知りたいかについて知らずにいきなり自分のことを話すのは、しんどいです。それは無理やり自分で裸になるような気がして、他人が自分に対してどう思っているのか知らない間にそういう相手に突然、あるいはすごく知っている人にみんな顔を知ってるし、みんな昔から同じクラスですし、その人に自己紹介をするのは、おかしいのではないか。やっぱり対話という所から入っていけばいいと思う。自分の考えでもいいし、自分のことでもいい。自分も、自分の考えというのはいきなり単独であるのではなくて、他人の関心との中でうまれてくるものであるのですから、やっぱり、人と人の交流の場をつくるのが先なのではないか。これを見て思う。

スピーチから始まるのがおかしいと思う。やっぱり、よい聴き手の前で。いきなり自分の考えはまとまりません。自分の考えを書いてまとめてわかりやすく伝えることは大切な技術ですけれど、それは一番最初にやる技術ではないですし、まず、自分は何を考えているのだろうか、自分は何を疑問に思っているのだろうか。ということをお聴き手の前でゆっくりととつとつと話していくのが人

間の自然な流れだと思います。でかつその自分について話す時は、それは何も強制されて話すことではないし、これを覚えて話しなさいではないし、やっぱり自分が本当に考えたことを話すべきなのである。こういう教材をみて思うのが、教材ですから大勢の子、何千人、何万人の子に教えないといけないというすごいプレッシャーの中で作られた教材ですけれども、フォークとおはしの違いについてだれが何のために話したいのか。本当にそのことについて話したいというのがなければ、自分の意見を出して、なんか言わないといけないということだけを言うだけであるそれはどういう意味において表現というのか。と私は思ってしまいます。やっぱり、自分が本当に考えたい。ここは、自分は言いたいということ、そこを本人が捜せるような環境をつくるのが大事で、先ほどの「もだちや」の教材もそういうふうにして、それぞれ40人のひっかかるポイントは違いますから、どこでひっかかるかということを持ってないといけない。ある子はミニカーとお金についてどちらが、大事かがすごい気になっていた。自分はお金よりも、つまり交換可能なものよりも、交換できないミニカーの方が大事だということが、この子にとって一つの真理である。このことやほり一つの真理だと思うのですよ。やっぱりここが、自分が言いたいという所まで掘り下げないと言葉は出てこないということだと思います。ですから、一対一では出すのは難しいですから、大勢で話をして、人の意見を聴きながら、自分の関心や、ひっかかった所で話したくなるということがやっぱり意味があることだと思う。

パネルディスカッションやディベートはやれば良いと思うのですが、なかなか難しい。院生が小学校の時に、ディベートをさせられた「男がいいか。女がいいか。」このテーマはいいのですが、なんのために話すのが大事である。それがなければ、みんな必死に探しませんから。例えば、あなたが宇宙に行くときにフォークかおはしかどちらかしか持っていきません。どちらにしますか？と言われれば、リアルに考えるのならおもしろいかもしれませんが。やっぱり子ども達が本当にリアルに自分の問題として考えられ、いい答えが出せて、その答えが自分にとって満足できるかということ、自己評価ができないと本当に形式だけに終わってしまう。パネルディスカッションでいくつか立場を分けて、地球温暖化のテーマだとすると難しい問題ですけれど、大人の真似をして地球は大事だと思いますという子たちと、自分の生き方が大事という子たちとチームで。もちろん自分の個人の生命、価値観が最も大事だということと、集団なり歴史、あるいは自然。倫理として考え時に、テーマとして個人の尊厳とか価値というと全体とどちらが大事かということについて話し合うことも大事ですけれど、難しい。かなり、大人だってできないし、訓練しないとできない難しい問題でやるよりも、それを真似してやるよりも、自分がどんなふうに自然に徹していてもっとも身近なことから初めて、その時、自分は何に関心を持つのかということから話し合うことの方が表現により近くなっていくのではないかと思います。

金澤 授業記録で今回振り返ってみて、子どもはすごいということに気がついた。子どもの発言をどう受け止めるかということが、僕なんかにくらべると本間先生の方が読み取る力がある。その価値に僕たちも気づいていけば、授業の中でおざなりに聞いていたことが展開を呼ぶとか。いろんなことができるのではないかと。その一端になればと思ってこの話をして頂いたのですが・・・

一度発言記録に戻ってください。苦し紛れに「君たちどうだった？」と尋ねている。貸し借りというので、子どもたちはよくもめているので、単純にそんな経験あると聞くと意見がでてくるかなと思って、尋ねてみただけである。そんなのでいいのかな？

本間 絵本を使う授業の場合は、絵本の中に答えはなくて、子ども達の中に答えがある。教師もそれを知りたいというのがとても大事なので、もちろん大半は、フェーズ5まで本当の友だちをめぐって、ミニカーがどうのこうの物語の話に終始するのですが、どこかであなたでどうなの？という聞き返しが大事だと思うのです。そんなに考えなくてされたということですが、それはなぜ？

金澤 自分の経験の中で、子どもは答えるだろうなということを尋ねてることなのだけれど、その尋ねているということが、やっぱり、みんな気がついていないけれど、価値のあることなのだと思う。普段やっている授業の中の何気ない対話の中が。本当は授業の中である答えを見つけるという授業も大切だけれど、何気ない対話を繰り返すことが、子どもが考えていることの価値というものをわかってほしいな。無駄なようでみえて無駄でない。そういうふうな対話が授業のなかで作れるということが授業の広がり、いろんな展開が見えてくるというか。ねらいはなんなんだという話ではできないのだけど。そういうふうにして聞いている。

本間 今、ねらいというのを否定されたのですが。道徳の時間は、指導要領には、他人の話聞いて自分でまとめるというのがありますし、後、いったん自分の身近なとこにひきつけながら、おそらくは、みなさんに一番難しいと想像するのは、単なる経験談となるとおしゃべりになってしまうので、うまく交換することと贈り物という価値の違いという話にいくのです。お金というものとか、これあげるからこれ頂戴という取り引きみたいなものと何かをあげるという行為は違うということは何名かの子どもさんは言っていた。その意味の違いを漠然とであるけれど、子どもたちは知っているの、私なんかは知識を持っていますから、交換される価値と贈与される価値は違うという議論はあるのです。哲学のなかで、見つけることができるから私はおもしろがっているだけなのですが、それは、私みたいな人を使ってもらって、私にはとてもよい経験である。これにはこういう現代哲学、倫理かな。議論があるのです。また、経済的な価値とは何かという考え方に贈与という。友だちは何かと考えるときにも、贈与という価値から考える、贈り物をするということから友だちが始まるのかという議論があるのです。難しいけれど、繋がるのです。私たちにどんどん聞いてもらえば、子どもたちはこんな議論をしているのですが、どうなのでしょうかと聞いてもらえれば、これはこういうことですよと共同作業ができますので、こういう機会を持って頂いて、繋がると相互利益があるなと思います。

金澤 何か質問はありますか。

B 先生ぼくたちがよい聴き手になる進行役になることで、子ども達は話したいとか、言う力がつくとか。聞きながら考える、しゃべりながら考える力とか、そういう力がついていくのかな。ぼくらが聞き役になることで、こういういいことがあるということととらえている。子どもの聞く力というのは、それ以前に規律でつけていたり、こちらが聞いている姿をみせてつけたり、そういう感じになるのかな。こういう授業をしていたら、自然と聞く力も話す力も考える力も全部つくのではないのではないかと思った。

本間 大人が見せてやらないといけないのは、聞く態度をしっかりと実演してみせて、こういうふうに受け止めてくれるのだということを経験させることだと思う。そのもっと前にこの手のことをなぜ小学校入学以前の小さい子でやるかという、聞きながら考える態度を養うしつけをしている。何をやるかは単純に、誰かが話している時は、だまる。対話というのは、言葉の共有スペースを、席をゆずるみたいなもので、あるいはマイクでもいいのですけれど、ゆずりあいです。じぶんが言いたい

ことがあっても、誰かがしゃべっている時は、今誰れさんがしゃべっているから聞きましょう。幼稚園の時から人によってはやっている。小学校でもされていると思いますけれど、大前提である。だから聞く態度というのは、内容ではなくて体の使い方です。後ろ向かないとか。そういうのは必要だから低学年から根気強くやっているのです。だから、この内容をやったら自然にこうなるではないと思う。やはり、海外の小学校で1年生から、もっと低学年からやっているのは、そういうしつけが入っているからだと思う。グループ学習になるとやはり先生の目が届きにくくなるので、同時に話してしまう。同時に話すといけない。対話にならない。誰かが話している時は、自分の言いたいことがあっても黙って聞くということが、これだけが、唯一の対話のルールなので、それにもものすごくついて教員も生徒もともにコミットメントしないといけない。おっしゃる通りだと思います。

C 先生すごく教師側にも聞くという訓練がいる。教師も聞くといことがすごく大切な要素に入っているのだなということを感じます。ひとつ教えてもらいたいことがあって、板書。聞くことで子どもとわーと話している時に、板書するべきなのか。教師というのはいつもまとめたがる部分があったり、子どもの言った中で自分がずっと気になったことを短く書きますよね。それよりも、書かない方が、ふんそうなのか。どうや。と言って、つなげていく方がいいのか。そのあたりが低学年、中学年、高学年によって、学年によって、違うと思うのですが、どうなのでしょう。板書について。教師はまとめたがるが、黒板に書かないほうがいいのか？聞かせたほうがいい？

本間 私は、多くの経験はないのですが、いろんな見聞きしたことから想像して考えるのですが、両方ありだと思います。たぶん、3、4年生ぐらいまではあまり板書はされずに多くの意見がでることに時間をとったほうがよい。1時間というのは、あつというまですよね。書くときすごく時間がとられますし、そのへんそこであつという間に場が変わってしまうので、書く人とそれを写す人という関係が決まってしまうので、でも、5、6年生では、オーストラリアでも他の学校でもやっていたし、書くことを取り入れていいとは思いますが。だから学年によって力点置き方が、そういういろんな人が発言をして聞くことができているれば、まあ今言ったことを書いてみようか。ということをやってみてもいいし、小さいフリップチャートにちょっと言葉を書いて床に置くとかされてますから、どんどん取り入れられたらいいと思います。

後、おっしゃった質問の中ですごく大事なことは、教員が自分の気になったことを書きたくりますよね。よくわかるんですが。まあ低学年から、慣れていないクラスならば、教員がコントロールするのではなくて、子ども達が自分達でうまく進む方向を決めていくことの方が大事なので、むしろ教員は聞く側にまわって、かじ取りはするんだけど、本人達が自分達で決めていくというのにやっていくのが理想だと思います。難しいことです。そこは大変難しいことです。それだけが唯一の答えではないので、いろいろやってもよい。

D 先生さきほど、ディスカッションとかディベートは形式的にとらわれないのがいいとおっしゃっていましたが、やはり我々は教科書を見て、そういうことを教えるといのも大切なと感じてしまうのですが。どういう感じで教えたらいいのでしょうか？

本間 ディベートとかパネルディスカッションはされたらいいと思います。ただ、言いたいことは形式が必要ないということではなくて、形式にとらわれることは必要ないということと形式を守ることあまり意味がないということですね。形式とは何かというと私たちがそれを使って自分のしたいことができることがたぶん大事なことでなので、問題は教員や生徒たちが自分の言いたいことしたい

ことを言えているかどうかをチェックすることがもっとも大事であって、それにディベートという形式があてればよいと思う。形式が無駄だとか、やめてしまえというそういうなんていうか、根っこひっくりかえすことを言っているつもりはなくて、ディベートしているはずなのに、議論が変わって違う形になっていいと思う別に。最初は意見がでにくいから、賛成、反対に別れましょう。どんどん答えて、すいません。先生意見変わってきました。じゅあこつちに移ると言っていて、どんどん変えてもよい。だから賛成、反対で勝ち負けが勝敗決まるまで討論するといのにそんなに意味がないので、最初に考え始める時に、賛成、反対を決めるのはとてもいいことだと思うのですが、それは便宜的なことであって。

金澤 忙しい時にありがとうございました。本間先生とやっていく時に、オーストラリアの学校も大学の先生と授業をつくったりということやったりするので、本間先生は引き出しがいっぱいあってディベートとか、大学で表現などの授業をされているので、いろいろ勉強されているので、質問して頂ければ、ほとんどのことは返ってくるので、できれば授業がつくっていきける自分はこんなことをしたいといのがあったら、相談をしていけると思っているのです。今度の研究会にむけて、阪大に言って、もし学年で授業をつくりたいということがあれば、時間をとって一緒にやってみたいと言われていまして、対話しながら授業がつくれたらなと思っています。この友だちやの授業は、大変楽しくて今回は他のクラス3クラス全部やりました。すごく楽しかったです。去年の5年生は、いつでもできるので、やってみればおもしろいと思います。おちばのやつもとてもおもしろいので、その時1時間やってみて、こんな意見がでてきたということをおちば先生にぶつけると、つぎこういうふうに展開したらいいと、今見たとおりの流れででてくるので、アドバイス受けれるのでは是非、そういう対話を大切にしてお考え、話すというそして聞くという対話あたりを、やっていたらいいのではないかと私は思っています。

是非、人権でもしていただければと思っています。こんな授業をしてみたいというのを話しながら、できればと幸いかなと思います。

本間 せっかく紹介いただいたので、今日一緒にきた、大学院生や教員のみなさんは、全員ではないのですが、わたしと一緒にこういう試みに関心を持って取り組んでおられます。私一人だと遠慮されるかもしれませんが、私は雰囲気は自分と違うから話しにくいと思われる方は、別の人を紹介しますので、後ろにいる高橋さんも一緒に調査されている専門家なので、どうぞわれわれを利用して、ちょうど今私の大学院の場で学ぶ場を考えるとという小規模な研究会をつくってございまして、是非その場に一回きりでもいいですので、来て頂いて。中川さんは中学校の先生をされながら、大学院で勉強されているので、学ぶ場ということを広く、哲学にこだわらず、学ぶということについてもう一回考えたいということで、塾の先生であったり、小学校、中学校いろんなわりとなんでもフラットにフリーに話し合う場所を作っています。

金澤 すごい知識をもっておられるのですが、論文を書くだけでなく、現場に出ていって臨床哲学や臨床というものである。教育でも臨床の知とよくできていますのですけれども。そういう現場と対話しながらやるといので取り組んでおられるので、刺激を受けることが、自分のためになると思うので、私ものぞいて学ぶことがあるので、是非、これからもできればいいなと思います。これで終わります。

対話とは 「問答」＝問いと答えを繰り返しながら考えること

- ・おしゃべりではない。
- ・人から聞いた知識をそのまま横に伝えるのではなく、自分や他人の疑問に耳をすます。
- ・対話では、聴くこと、理解することが何よりも大切。
- ・言葉の席のゆずりあいである。